

巻頭言

中村 恵¹⁾

2014年4月、新たな教育研究理念とともに、私たちの学部「現代社会学部」が誕生した。よく指摘されるように、現代社会においては国民・地域住民が、ゆとり、豊かさ、そして幸福を実感し、安心して健康的に暮らすことのできる社会の実現が重要な課題となっている。その実現されるべき社会は、経済的な豊かさだけでなく、社会的な豊かさ、すなわち多種多様な人と人とのつながりの豊かさ、安心・安全に日常生活を営むことができる自然環境や社会環境の整備、そして健康で幸福な暮らしを維持できる社会保障のしくみなどを包含した「持続可能な成長」を遂げることができなければならない。

こうした社会の実現に資する研究は、実はひとつの専門分野だけで蓄積されるものではない。社会は人と組織で構成されているが、その内実を探れば、それら構成要素が持つ歴史や文化、そしてその中で育まれてきた広い意味での技術やモノの考え方がそれらの中に醸成されている。そして、それらを前提としながら、その社会を律するルールの体系やその維持・向上のための機構も形成されている。社会を多角的、多面的にとらえることが社会研究の使命だとすれば、そしてそれが現代社会においてより強く望まれているのだとすれば、それは現代においては非常に細分化されたいわゆる「専門知」のみによって行われるものではなく、むしろそうした「専門知」の交流から生まれる「総合知」を必要としている。

私たち現代社会学部の教育・研究上の理念・目的は、現代社会のありようをまさに多角的に検討し、(1) 社会の多面的な把握とグローバリゼーションの内実の深い洞察に基づいた、地域における豊かで幸福な暮らしの実現とその持続可能なあり方の学際的な追及、(2) 社会的な相互扶助精神の涵養に基づいた地域社会における災害等のリスクに対する適切な準備とその方法に関する探究という2つの観点から追求することと規定している。現代社会学部構成員のそれぞれの学問分野が、社会学をベースにしながら、経済学、経営学、政治学、行政学、社会福祉学、歴史学、哲学・倫理学、教育学、工学と学際性を濃厚に有しているのは、この教育・研究上の理念ゆえである。

もちろん、「専門知」の交流から「総合知」を作ることは容易なことではない。否、それを真に実現するためにも、逆説的であるが、それぞれの「専門知」を掘り下げていくことが不可欠ですらある。現代社会学部の学会紀要である本「現代社会研究」は、まさに現代社会分析における「専門知」の深耕と「総合知」形成のための「専門知」の交流を実現する場を提供する。この紀要の発刊によってアカデミックによる社会分析の更なる進展に貢献することを、私たち現代社会学部は宣言し、約束する。

¹⁾ 神戸学院大学現代社会学部長（現代社会学会会長）